

IV-3

都心部道路のデザイン検討

— 札幌都心部ロマネット計画 —

札幌市役所建設局土木部 正員 城戸 寛
 札幌市役所建設局土木部 正員 高宮 則夫

1. はじめに

開拓当時から大通と駅前通を核としながら発展してきた札幌の都心は、120年の歳月を経た現在、北海道の行政・経済・産業の中核管理機能を担いながら文化・芸術などの情報発進基地としても重要な位置にあり、札幌市のシンボル空間として市民はもとより市を訪れる人々に様々な活動の舞台を提供しています。

しかし、オリンピック当時に整備された都心の街並みは老朽化しており、国際都市として道央圏の中核都市として21世紀にふさわしい都市基盤整備が急がれています。

このため、快適な都心空間を目指し、アメニティや景観を考慮にいたした道路空間のリフレッシュ事業による都心部の再整備計画を策定することになり、昭和63年度より検討に着手しました。

本報告は、近年、各都市で実施されている道路整備を中心とした都市開発の検討事例として紹介するものです。

なお、本報告の検討フローは以下のとおりです。

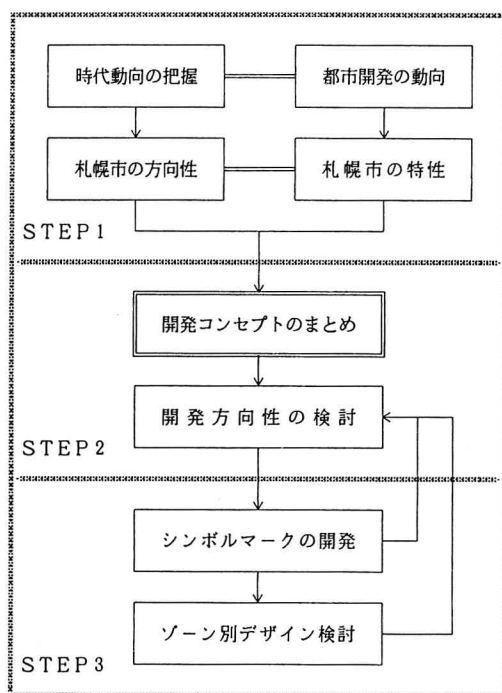


図-1 都心部道路のデザイン検討フロー

2. 時代動向と札幌市の基本的な方向性

(1) 時代動向

日本の時代変化は10年サイクルといわれます。

西欧文化の生活道具を手にいれていた〔'60年代-HAVEの時代〕、手にいれた生活道具を使い、おしゃれや旅行や街を楽しむ〔'70年代-DOの時代〕、このように、時代のながれのままに形成してきた生活文化が、本当に自分にふさわしいの



写真-1 発展を続ける札幌都心部

か、必要なものなのかを考え、自分の在り方から考える〔'80年代－BEの時代〕という流れです。

そして今は、自分の在り方に基づいて自分らしい生活を見直し再構築する「RE」行動が盛んです。すなわち、'90年代の新しい生活文化へ向けてのRE by BEの時期になっていると考えられます。

(2) 時代の方向性

このRE行動と共に、生活を包む環境の変化も進行しています。ハイテク化の進行や規制緩和による事業拡大とサービス産業への発展、情報化社会、高齢化や女性の社会進出、国際化、国際化に連動した24時間化などが生活と環境を変化させています。

それゆえに、生活の再構築はこのような変化も取り組みながら「自分らしい生活を質的に成長させよう」という方向性を持ち始めています。すなわち、〔'90年代－GROWING〕の時代が始まろうとしています。

【時代は今】－見直し、再構築：RE by BE

【時代の方向性】－GROWING（質的成長）の時代

(3) 札幌市の基本的な方向性

見直し再構築の時代の中で、地域構造の再構築も進行し、その新しい構造の中でのそれぞれの地域の役割や位置付けが問われ始めています。すなわち、他の都市の垂流ではなく、地域都市独自の文化を踏まえ、現代へ寄与できる創造力が問われています。

札幌市は、東洋文化と西欧文化の融合から生まれた現代日本文化の東京と対になる実験文化都市でした。現代の東京の役割と魅力が「東西文化融合と新文化創造」という点にあるように、札幌市もその歴史的役割を生かし、北に於ける「文化融合創造都市」としての「価値」を再開発していく時期に至っていると考えられます。

このような観点から札幌市の基本的な方向性を分析してみると、札幌市は再び「フロンティア」の時代を迎えようとしていると考えられます。また、今後の国際文化融合と創造は、「東西文化融合」だけではなく「南北文化融合」も大きなテーマとなると考えられます。

【基本的な方向性】

「成長の時代を背景に、東西南北、4つの文化融合と創造を＜21世紀の北文化＞という視点から推進していく、ニュー・フロンティア都市へ」

3. 都市開発動向と札幌市の特性

(1) 基本動向

地域都市独自の文化を踏まえ、現代へ寄与できる創造力ある都市づくりに向けて、都市の在り方そのものが見直され、時代と生活に対応した新しい「都市構造と内容」の再開発が進行しています。

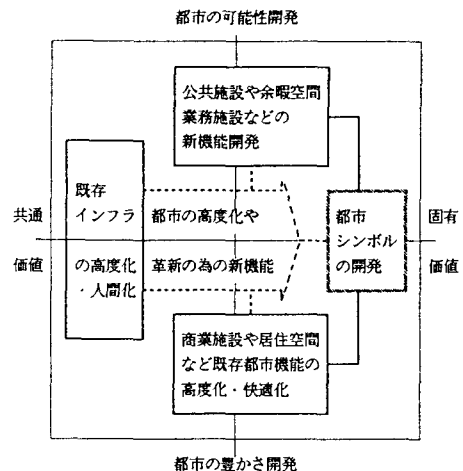
a) 商業地域、工業地域といった機能分類型の視点から、ヤング街、ファッション街、芸術と文化の街といった「生活への役割」を重視するように変化してきている。

b) コンベンション機能、テレポート機能、地場産業交流機能、産業育成機能など新しい都市機能開発が再開発のテーマとなってきている。

c) 新交通システム、情報システム、エネルギーシステムなど、ニューインフラと言われる都市構造の開発整備が課題となっている。

d) その都市の独自性を、文化・産業・都市空間など、総合的に再構築していこうという、地域CI開発も全国的に推進されている。

図－2 都市開発の構造チャート図



(2) 都市開発と道路の役割

これらの開発動向を分析すると、都市のインフラ開発が全体の開発の基盤となり、総合開発の軸となっていくことが予想されます（図－２）。

すなわち、道路は単なる交通空間としてのみ機能するのではなく、

a) それ自体が新しい都市の中核機能を持つ。

b) 道路を取り巻く

生活空間や事業空間、公共空間、自然空間を有機的に関連させ、都市の豊かさや可能性、シンボル性を創造していく機能を持つ。

と、考えられます。

まさに、今後の道は生活文化を育て、産業を育て独自の都市の魅力を形成するものであるといえます。

(3) 札幌市の特性

札幌市は、エネルギー導入と流動的集中化による成長都市であり、今後の成長に向けて、新しいエネルギー焦点探しと地域のエネルギーの開拓、都市のコンプレックス化、それらの軸となる「札幌独自のテーマ＝アイデンティティ」の発見・再構築が課題となっていると考えられます。

また、都心のミチ構造の特徴は、グリッド構造にあります。「北3、西6」といった、記号的な位置確認は、ミチの複合化・複層化の中で、増加する新市民や観光客に分かりにくく、札幌全体のイメージを均質にし、その多様な魅力を伝えにくいものとしています。このことは、新しい魅力形成や、地域活力育成にも関わる重要な問題となります。

このため、景観形成に際しては、このようなグリッド型の構造の中でのニューインフラ構築を踏まえランドマークやゾーン毎の独自の景観開発を考慮していくことが必要となります。

4. 開発コンセプト

これまでの検討から「都心部道路のリフレッシュ計画＝都心の顔づくり事業」のコンセプトは、今後の札幌市の基本的な方向性＝「成長の時代を背景に東西南北、4つの文化融合と創造を＜21世紀の北文化＞という視点から推進していく、ニュー・フロンティア都市」を目指す軸として、表－1のとおりまとめることにしました。

表－1 開発コンセプトのまとめ

■ コンセプト	◆ 都市インフラ軸の再構築	◆ 札幌市の アイデンティティへの寄与
Sapporo Romantic Street Network	1. 周辺都市文化資源を踏まえた、テーマのある都市軸道路の開発 2. 都心機能や歴史文化資源をつなぐ、都市軸道路の開発 3. テーマに基づく景観開発と、ゾーン型の景観形成の考慮。	1. フロンティア文化と ニュー・フロンティア精神 を表現するシンボル・ロード
SAPPORO Romanet	1. 駅前通りのメイン軸化 4. 北5条通りの可能性開発 2. 北1条通りの大通りサブ軸化 5. タテの通りの、接続ブランチャ化 3. 北3条通りの再生	2. 未来創造実験のシンボル・ロード 3. 国際化のシンボル・ロード 4. 北文化のシンボル・ロード
札幌の歴史文化資産と フロンティア・スピリットを物語りつつ、 21世紀への新しい夢を生み、 文化と産業の可能性を創造していく軸となる 都心の顔としての シンボル景観ネットワーク道路	◆ 都心機能の豊かさづくり 1. 市民文化機能や歴史文化資源を踏まえた、文化の道路開発 2. 情報産業の集積や企業情報施設を活用した、情報の道路開発 3. 企業集積を活用したオフィス街に於ける道路の在り方開発 4. 自然資源を生かした都市型快適空間としての道路開発 5. 国際的な、情報・職域・快適空間機能の開発への寄与	
	◆ 都心機能の可能性開発 1. 国際交流の場を補完する道路の開発 2. 情報ネットワーク軸となる道路の開発 3. 企業イメージ発信の場となる道路の開発 4. 産業と「都市・人」との新しい接点となる道路の開発 オフィス・店舗の在り方、地域文化との連動、異業種との交流など	

この再整備計画は、開発コンセプトの決定に伴い「札幌都心部ロマネット（ロマンチック・ストリート・ネットワーク）計画」と呼ぶことになり、それぞれの地区の特性を十分考慮しながら、具体的なデザイン検討を行うことにしました。

5. 開発の方向性

札幌市の都心部は、大きく3つの地区に分けられます。歴史・文化の顔を持つ大通北側地区、ショッピングタウンの顔となっている大通～国道36号の地区、そして歓楽街であるススキノ地区であります。

開発テーマの設定にあたっては、それぞれの地区の周辺特性を十分踏まえる必要があります。

特に、景観散歩道を中心とした大通り北側地区については以下の4つのテーマを設定し、ゾーン開発を行うことにしました。（図-5）

a) 赤煉瓦を中心とした北3条通りゾーンを、札幌市の原点であり、未来への発展の原動力であるフロンティア・スピリットを表現する「煉瓦のロマネット」として整備。

b) 市民生活のシンボルである市役所と時計台から、植物園、知事公館や美術館など市民の生活文化ゾーンへとつないでいく北1条通りゾーンを、札幌市の四季や生活文化を表現し、育成していく「時のロマネット」として整備。

c) 美術館や市民文化施設を中心とした北2条通りゾーンを、美術や音楽、映画などの現代文化活動を活性化し、次代への蓄積と子供たちの感性の育成を図る「美のロマネット」として整備。

d) 駅を起点として植物園の北側に接する、北5条・4条通りゾーンを今後の都市機能と自然環境の調和を図りつつ、札幌市への活力づくりとよりよい都市環境の形成を目指す「緑のロマネット」として整備。

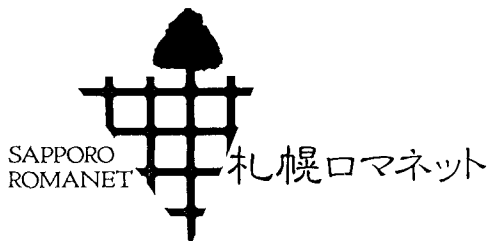
6. シンボルマーク開発

(1) シンボルマーク

ロマネット計画は都心の顔としてのイメージ形成

と今後の市の発展へ寄与する道の在り方を表現していかなければなりません。そのためのシンボルマークを図-3のようにデザインしました。

図-3 シンボルマーク

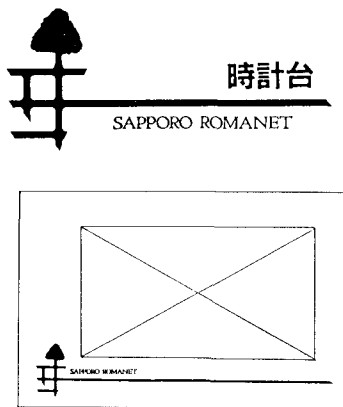


すなわち、このマークの下半分は、グリッド型の札幌の道が、樹木の根のように都市を支えながら多様な交流や動きを集めて成長していくことを示しています。マークの上半分は、緑豊かな札幌の都市空間がさらに未来にむけて「成長する道」とともに発展していくことを現しています。

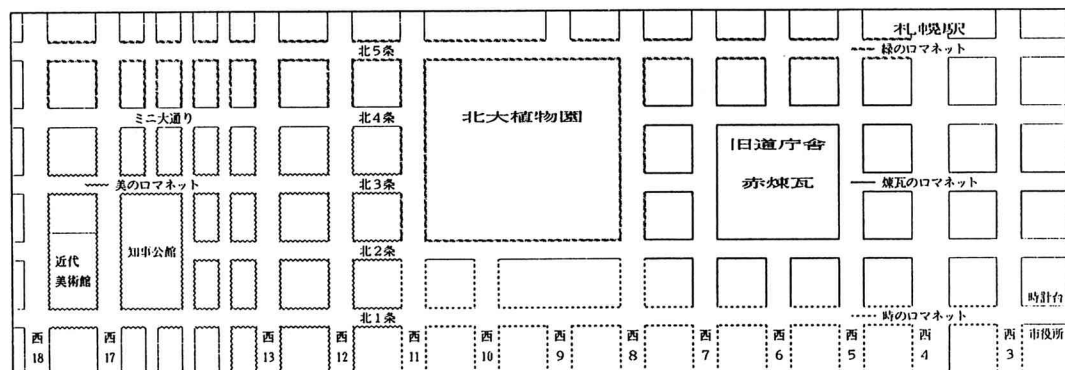
(2) システム展開

札幌ロマネットは都心を訪れる人々に、市の案内や目印を提供するとともに、都心の顔として札幌の歴史や現在や未来を語っていなければなりません。そのためにはサインや情報板の充実とイメージ形成も重要です。この点を考慮し、シンボルマークを基本として図-4のようにシステム展開し多様な情報表現に対応しながらイメージ統一を図れるデザインとしました。

図-4 シンボルマーク展開例



図ー5 大通北側地区のゾーン開発テーマ設定図



7. ゾーン別デザイン検討

この段階でようやく、これまでの検討結果によりゾーン別のデザイン検討が可能となります。ここでは、「煉瓦のロマネット・ゾーン」を代表事例として検討内容について説明することになります。

(1) 開発の考え方

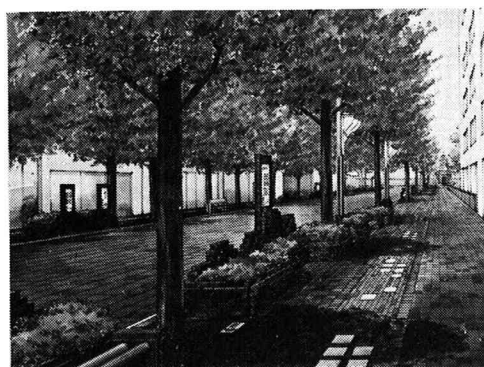
対象ゾーンの資源と特性を把握し、開発目的および開発視点を明らかにしました。

a) 資源と特性

北3条通りは、歴史文化資源として<旧道庁、道立文書館、北大植物園、「札幌舗装道路発祥の地」碑、札幌市道路元標など>を持ち、快適空間資源として<道庁前庭、北大植物園、イチョウ並木、景観散歩道など>を持っています。また、都市文化資源として<エルム画廊、大同ギャラリーJALプラザなど>を持っている「歴史と散歩・交流」を中心とした札幌を代表するゾーンです。

b) 開発目的

北3条通りの「歴史と散歩・交流」という特性を踏まえ、本ゾーンに於けるロマネット開発は、「歴史的なシンボル都市軸として北3条通りを再生し、札幌を代表する国際的な歴史景観ゾーンとする」とともに、札幌の歴史とフロンティア・スピリットをテーマとした交流や産業の道づくりへの参



写真ー2 「煉瓦のロマネット」デザイン
(イメージパース)



写真ー3 ロマネット計画のシンボル空間
(北3条通り：平成元年度完成)

加を提供する」ことを目的としました。

c) 開発視点

そのための開発視点として都市機能の充実・拡大・革新のために、

1. 札幌歴史資源を表現する、歴史文化機能の開発
 2. 北3条通りに位置する重要な歴史文化資源である道庁と植物園を接続する道として景観的にも動線的にも一体化して開発
 3. 国際交流や観光を補完する「札幌を語る道」としての開発
- を基本視点としました。

またさらに、新都市機能開発への寄与を追求するために、産業と「都市・人」との新しい接点となる道として、札幌の歴史文化の景観形成への参加の促進を周辺視点としました。

(2) 開発テーマの設定

以上をこのゾーンの開発テーマとしてまとめたのが表－2です。

表－2 開発テーマのまとめ

開発テーマ
「煉瓦のロマネット」開発 赤煉瓦によって形成された札幌の歴史的景観のシンボル・ロード すなわち、札幌の歴史を代表する、歴史的な事象を伝える、歴史景観を生かしつつ、新しい景観を創造する札幌ロマネット
杖幾有忌 札幌の歴史を眺めて歩く、歴史情報伝達機能 連続的なテーマ設定と、テーマに基づく道づくりによる都市回遊機能
景観現 歴史的事象（出来事、景観の歴史、人など）をモチーフにした舗道や道装置のデザインの開発や、回遊の目的・目印となる「歴史オブジェ」などの設置の推進。 素材は札幌フロンティアを代表する瓦葺灯と赤煉瓦素材を用いる。 デザインは伝統を生かした未来への挑戦をテーマとして、周辺との調和を図りつつ伝統素材を用いたモダンデザインとする。 ビル1階の煉瓦化による協力や、歴史オブジェなどの設置への民間からの参加を、制度的に推進することも検討する。

8. おわりに

「札幌都心部ロマネット計画」は、自治省の「ふるさとづくり特別対策事業」に認定され、平成元年度より事業化されており、道庁前の「北3条通り」は開発テーマのとおり整備が完了しています。

平成2年度は、近代美術館周辺、時計台周辺、ショッピング街、ススキノ地区についても着手しており、平成10年度までに都心部の道路のリフレッシュが完了する予定です。

本報告では、このロマネット計画の検討結果のみを紹介するに終わりましたが、この計画策定には多くの問題点がありました。

- (1) 都心部道路の在り方について、特に歩行者空間の取扱について
- (2) 面的な都市再開発、特に中長期計画との整合性について
- (3) 道路整備が都市デザインを誘導することが可能かどうかについて
- (4) シビルミニマムとアメニティの問題など

これら都心部道路のデザイン検討にかかわる問題点について、ロマネット計画の策定ではどのように整理したかなどについては、ぜひ次回報告させていただきたいと思います。なお、この検討内容が、今後の道路整備を中心とした都市開発の検討に少しでも参考になれば幸いです。

最後に、ロマネット計画策定のとりまとめにおいて、全面的にご協力をいただいた中村正樹（黒川玲建築設計事務所）、佐藤泰久（佐藤泰久地域経済研究所）両氏に心より感謝の意を表します。

参考文献

- (1) 札幌市景観散歩道基本計画
- (2) 札幌ロマネット全体計画
- (3) 第3次札幌市長期総合計画
- (4) GROWINGの時代
＝横浜国立大学 境忠宏助教授の分析による